慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	論贊と随想の流れ
Sub Title	Essays in "lun tsan"
Author	藤田, 祐賢(Fujita, Yuken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.78- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論贊と随想の流れ

藤田祐賢

一

芥川龍之介は、その短篇小説「酒蟲」の終りに、なぜ主人公劉が酒虫を吐いて以来、その健康が衰え家産が傾いたか、について、代表的な三つの答なるものを掲げ、『これらの答の中で、どれが、最よく、當を得てゐるか、それは自分にもわからない。自分は、唯、支那の小説家の Didacticism に倣って、かう云ふ道徳的な判断を、この話の最後に、列擧してみたまでゝある。』と結んでいる。ここで中国小説家の道徳的判断と呼ばれているものは、唐の伝奇以来、しばしば文言小説の末尾――きわめて稀には冒頭――に、その小説の著者自身によって附記されてきた論贊形式の文章である。芥川の「酒蟲」の取材源となった清の蒲松齢の「聊斎志異」では、「異史氏曰」にはじまる文がそれに当る。この類の文章の内容は、その小説に対する著者自身の批評、感想、執筆の動機、経過などを述べているものであるが、概してそこに多くみられるのは、儒教道徳的なポーズであり色彩である。芥川が〝道徳的な判断〟と言っているのは、この傾向をとらえているわけである。次に引用する「異史氏曰」などはその好例と思われる。

余於孔生不羨其得豔妻、而羨其得賦友也。観其容可以忘飢、聴其声可以解頤。得此良友、時談宴、則色授魂與、尤勝於顚倒衣裳矣。(「嬌娜」)

私は孔生に対して、彼が美しい妻を得たことを羨ましいとは思わないが、彼が親しい友を得たことを羨ましく思う。その友の容貌を見れば飢を忘れられるし、その声をきけばおとがいを解くことができる。このようなよい友を得て、時に酒をくみかわして語りあうならば、肝胆照しあって、女色をほしいまゝにするより、はるかにまさっている。

この文のついている篇は、つぎつぎに登場する狐の女の美しさに魅了される書生の物語であるが、美しいロマンの世界に酔いつゝ楽しく一篇を読み終った後に、このようなものを読まされては、まるでお説教を受けているようなもので、折角の興を殺がれること、まことにはなはだしいと言わねばならないだろう。ところが次のようなのになると、単なる訓戒とは、たいぶ異ったものになっている。

性癖其志凝。故書癖者文必工、藝癖者技必良。世之落拓而無成者、皆自謂不癖者也。且如粉花蕩産盧雉傾家、顧癖人事哉。以是知慧黠而過乃眞癖。彼孫子何癖乎。(「阿宝」)

生来の癖人は、なにか一つのことに一念が凝る。だから、〝本の虫〟の文章は、きまって巧みなものであるし、〝藝の虫〟の技は、かならずや立派なものである。世の中のふらふらしてなにもなしとげることのできない人たちは、みな自分では馬鹿でも気ちがいでもないと思っているのだ。ましてや女遊びをして家産を傾けるようなことは、まったく馬鹿者のやることではないか！してみれば、利口すぎるものこそ、本当の馬鹿だということがわかる。かの孫子(小説の主人公の名)がなんで馬鹿なことがあろう。

これは人間の愚かさに対して発した蒲松齢の随想であり、現代の鑑賞にもたえる立派なエッセイである。「異史氏曰」のなかには、このほかにも、伝統的な道徳的訓戒的なポーズをとってマンネリズムで形式的に附加されたようなものではなくて、内側に向った人

間的興味がにじみだし、懶情の精神に導びかれて、人間に対する静かな観照の行われているものが、相当数見受けられるのである。そしてこのことは、十七世紀末の小説集「聊斎志異」の中だけでのことではない。古くは、すぐれた伝記文学「史記」に見られるところの通常「論贊」と呼ばれる[註(1)]文体に属する「太史公曰」の中にも、数こそ少いが、すでに認められることなのである。わたくしは前に、文言小説に附せられた短文を〝論贊形式〟という言葉で呼んだが、それは、そのようなものが元来歴史文学の領域に生れた「論贊」というスタイルに倣ってうまれてきたものであったからである。しかしそれは単に形式の模倣だけには終らなかった。論贊の中に存在するエッセイの世界が、その流れを絶やすことなく、後世の、正統の文学とは目されなかった小説の、附随的な文章の中に流れていったのである。言い換えるならば、文言小説につけられた論贊形式の文が人間観照の随想の吐かれる一つの場となっていて、しかも歴史的に見ると一つの流れを形成していたということである。そのような随想の世界のあらわれた論贊形式の文の数は少く、その篇幅も大部分は極めて短いものであるが、中国のエッセイ文学という面から言えば、見のがすことのできない貴重な文章として指摘しなければならない。しかし従来はこの分野に眼のむけられることは、ほとんど絶無に近かったと言って過言ではない。小説に附けられた論贊形式の文は、十把一からげ的に、道学者的臭みをもったものとみなされて、毛嫌いされ無用視されてきたのである。とくにわが国の飜訳者、読者にはこの傾向が強かったように思われる。このような文の原文は、技術的に相当にこったものが多い。それがまたその文章に芸術的まとまりを与えている一つの重要な要素なのであるが、飜訳者や読者にとっては、難解な点ともなっているようである。しかしそれだからと言って見棄てられてしまってよいものではないだろう。中国の、人間の心境の記録である好箇のエッセイが、そこに存在することを見落してはならないと思う。

なお、最初に触れた芥川の三つの答に関係したことであるが、第一の『酒蟲は、劉の福であって、劉の病ではない。……』と第二の『酒蟲は、劉の病であって、劉の福ではない。……』という二つは、「異史氏曰」中の一句を応用して作ってある。しかし第三の『酒蟲は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。……劉は即酒蟲、酒蟲は即劉である。……つまり、酒が飲めなくなった日から、劉は劉にして、劉ではない。劉自身が既になくなってゐたとしたら、昔日の劉の健康なり家産なりが、失はれたのも、至極、當然な話であらう。』というのは、芥川自身の観察である。もちろん「酒蟲」はただ文章の面白さ、話の奇異をねらった作品で、この第三の答がこの

小説のテーマであるとか、芥川の人生観というような重要ないみをもつものではないだろう。そこにうかがわれるのは若い芥川らしい才気であるが、ただ第一、第二の答が、彼の言う道徳的判断になっているのとは違って、気軽な随想と呼んだ方がふさわしい内容であり、書きぶりでもある。芥川が中国小説の論賛形式の文に見られる随想の流れを意識して、同じく随想的な文に仕立てあげたのか、どうなのかということまではわからないし、またわかる必要もないことかもしれないが、ただ少しばかり興味を引かれることではある。

二

中国の歴史書で、体例を樹立して史実を分類し、条理をふんで表現する方法を作り出したのは、漢の司馬遷の「史記」である。その本紀十二章、表十章、書八章、世家三十章、列伝七十章の全章の中に、「太史公曰」で始まる一文が見らる。[註(2)] それらの内容は、史官としての司馬遷の毀誉褒貶の論として、一般的には受取られている。たしかにそう受取っていても決して間違いではないが、その多くが個人的な人間に対する形で批評を行ない感想を述べていることに、とくに注目してほしいと思う。彼の思想の中核をなすものは儒教思想であり、したがって「太史公曰」の批評や感想には儒教的色彩のあることは否定できない。しかし彼は道学者ではなかったから、表面だけの道徳的訓戒のようないやらしさなど、読者に少しも感じさせないのである。なかには史官としての司馬遷以外に、個人としての司馬遷が顔をのぞかせている、次のような「太史公曰」もある。

> 學者多言無鬼神。然言有物。至如留侯所見老父予書、亦可怪矣。高祖離困者數矣。而留侯常有功力焉。豈可謂非天乎。上曰、夫運籌筴帷帳之中、決勝千里外、吾不如子房。余以為其人計魁梧奇偉。至見其圖、狀貌如婦人好女。蓋孔子曰、以貌取人、失之子羽。留侯亦云。（「留侯世家」）

学者の多くは、鬼神は存在しないが、怪物は存在する、と言っている。留侯が老父（じょう）であって書巻を与えられたようなこともふしぎなことと言うべきである。高祖は困厄にであったことがなん度かあった。しかるに留侯は、その都度、功力を示したのである。なんと天のなせるわざでないと言えようか！ 上は、「かのはかり事を帷幄の中にめぐらし、勝を千里の外に決することは、自分も子房

には及ばない。」と言われた。わたくしはその人を、壮大魁偉な人物と想像していた。しかしかれの画像を見てみると、その風貌は婦人美女のようであった。思うに孔子は、「容貌をもって人物を判断することでは、子羽（澹台滅明の字）で失敗した。」と言われたが、留侯の場合もそう言えよう。

これは、人間は顔では判断できないものだという感想を述べたもので、二十世紀の今日でも十分に味わいをもっている。また次のも好箇のエッセイである。

女無美悪居宮、見妬。士無賢不肖入朝、見疑。故扁鵲以其伎見殃、倉公乃匿迹自隠而當刑。緹縈通尺牘、父得以後寧。故老子曰、美好者不祥之器。豈謂扁鵲等邪。倉公者可謂近之矣。（「扁鵲倉公列伝」）

女子はその美醜にかかわらず、宮中に入れば嫉まれ、士は賢不肖にかかわらず、朝廷に入れば疑われる。だから扁鵲はその神技のために禍にあい、倉公は蹤迹をくらましてみずから隠れながら、しかも刑にあてられたのである。緹縈は帝に上書して、それによって父に晩年の安楽を得させたのである。だから老子が、「美しく好きものは、不吉の器である。」と言ったのは、扁鵲たちのようなものを言っているのではなかろうか。倉公などはこれに近いものと言えよう。

司馬遷のこのような評論の態度は、「史記」につづく「漢書」の「賛日」の中に受けつがれている。しかしそれ以後になると、散文ではなく韻文で書かれたり、散文で書かれているものでも、もっぱら史官的態度だけが強調されているものに変ってゆき、それらにはもはや司馬遷が書いたような随想的なものは影をひそめる。ところが唐代になると、韓愈、柳宗元の古文の中の、歴史書のスタイルに倣った〝伝〟と称する散文の中に再び姿をみせてくるのである。

三

韓愈には「太学生何蕃伝」「圬者王承福伝」「毛穎伝」「下邳侯革華伝」など、柳宗元には「梓人伝」「種樹郭橐駝伝」「宋清伝」「童區寄伝」「河間伝」などの伝記文がある。これらは歴史散文の系統をひくもので、伝記と論賛的な部分との二部分から構成されている。論賛的な部分は、論賛にならって、たとえば「毛穎伝」では「太史公曰」で、「宋清伝」では「柳先生曰」ではじまるというような体裁をとっているものと、そのようなことわり書きなしに伝記の文末に直接つけられているもの――「太学生何蕃伝」や「梓人伝」のように――との二様になっているが、その内容は、韓愈の提唱している古道、すなわち儒教的な道をあきらかに打ち出して評論を試みたものである。したがって、儒教的な色彩が濃厚なことは言うまでもない。たとえば柳宗元が、貞婦から淫婦に急変した婦人を書いた「河間伝」の「柳先生曰」は、次のようなものである。

天下之士為修潔者、有如河間之始為妻婦者乎。天下之言朋友相慕望、有如河間與其夫之切密者乎。一自敗於強暴、誠服其利。歸敵其夫、猶盗賊仇讎、不忍一視其面、卒計以殺之、無須臾之戚。則凡以情愛相戀結者、得不有邪利之猾其中耶。亦足以知恩之難恃矣。朋友固如此、況君臣之際、尤可畏哉。余故私自列云。

天下の、わが身の行ないを清く保っている人たちのなかにも、河間のような立派な家婦はいないであろう。天下の、お互いに相手を信じ慕っている朋友同志のなかにも、河間とその夫ほどに親密なつながりをもっていたものはないであろう。それなのに、その河間も、ひとたび暴力に屈してしまうと、心からその快楽に服従してしまい、夫をあたかも盗賊か仇のように敵視し、一度でもその顔をみることに堪えられず、ついに計略をもってこれを殺し、しかも少しも悲しみ悼むことがなかった。してみると、愛情で結ばれたものにも、邪や利のしのび込む隙がないとは言えない。恩を知っていると言っても、そんなことはたのみにならない。朋友だってこんなありさまなのだから、君臣の間柄ならなおさらのことである。まことに畏れつつしまなければならないことではないか。自分は、それだからこそ、このような伝を書いたのである。

この文の終りの方はあきらかに訓戒めいた色合をもっている。しかし夫婦愛の絶体性に対して疑いを発しているあたりは、今日読ん

でもなか〳〵に味わい深いものがある。韓愈の「圬者王承福伝」の論賛的な部分――長くなるので引用をさけるが――も、やはり儒教的ではあるけれど、エッセイとして興味ぶかいものになっている。「毛穎伝」では、本伝が仮託の伝で、筆を擬人化して書いたユーモラスな内容であるためか、「太史公曰」の方にも、ユーモラスな味がでている。このように、韓愈や柳宗元の書いた論賛形式の文は、儒教的な色彩を呈していながらも、立派にエッセイと見なされるものなのであるが、同じく歴史散文の体裁にならって書かれている唐の小説、いわゆる伝奇になると、だいぶ異った様相を示してくる。

伝奇の中にもしばしば論賛形式の文を附記してあるものが見られる。元稹の「鶯鶯伝」（会真記）のものなどはとくに有名――あまりにも儒教的道徳的であるために有名なのであるが――である。それらの大部分に共通して見られるのは、濃厚な儒教的道徳的な色彩であり、言っていることにも、韓愈や柳宗元のもののような深い味わいがない。それは、単に口先だけで陳腐な儒教的訓戒をしているからで、人間そのものに対する深い洞察力など、少しも見られないのである。「誓志捨てず、父夫の讎を復せしは節なり。傭保雑処し、女人たるを知られざるは貞なり。女子の行は、唯貞と節ともて能く終始これを全うせば已む。……善を知りて録せざるは春秋の義に非ず。故に伝を作りて以てこれを旌表す」（李公佐「謝小娥伝」）のようなものばかりでは、道学者的臭気のこもったしろものとして歓迎されないのも無理はないだろう。白居易の「与元九書」[註(3)]と宋の趙彦衛の「雲麓漫鈔」[註(4)]との記録を合せて考えてみると、当時の官吏試験の予備の挙選には、受験者が史才と詩筆と議論の三つの能力を見てもらうために、この三要素をふくむ伝奇文を作って主司に投献したことが知られる。だから、伝記文の末段に諷刺や議論を取り入れて史才と議論とを見てもらった、という考え[註(5)]がなされるのは、きわめて自然のすじみちである。伝奇文を考査する役人が韓柳派に属し、復古文の運動に共鳴する人々である時には、一層その傾向が著しくならざるを得ない[註(6)]、というのもうなずけることである。このことと伝奇文にみられる論賛形式の文の儒教的色彩の濃厚さとの間には、なんらか関係があるにちがいない、とわたくしには思えるのであるが、それはそれとして、伝奇につけられた論賛形式の文が、今日から見て、到底エッセイとは見なされないということには異論はないと思う。宋の伝奇にみられるものも、唐伝奇ほどではないにしろ、儒教的な陳腐なものである。ところが明を経て清に入ると、この類の文の領域に、西欧のエッセイに通ずるものをもつエッセイが生まれてきた。それが、最初に触れた「聊斎志異」の「異史氏曰」なのである。

四

「異史氏曰」は、「聊斎志異」の最初の刊本の趙本では、一八八篇の小説につけられている。これらに、「異史氏曰」とはなっていなくとも、小説の文末に直接つけられている論賛的性質の文のある三九篇を加えると、その数はかなりなものになる。「聊斎志異」以前には、個人の怪異小説集でこれほどの数の論賛形式の文をそなえているものは、ほかにはみられないが、この数の多いということよりも、今日の眼からみて、エッセイとして充分に鑑賞にたえる文や語句がふんだんに見られるということの方が、注目すべき特色である。それらの「異史氏曰」を執筆した際の蒲松齢の態度は、その時々によって実にさまざまであり、時には唐の伝奇のそれのように、道徳的もしくは訓戒的なかたいポーズをとって形式的に書いたり、また時には、同じようなかたい態度をとって小説中の登場人物を批評しながらも、それに関連して、人間の本質、もしくは行動に対する彼自身の関心や静かな観照を示したりする。ある時には、感情に駆りたてられて憤懣をぶちまけたり、すこぶる気楽な態度で筆を走らせて同類の話を取りあげたり、機智に富んだ警句を吐いたり、興の湧くままに彼の得意とする駢体文を作ったりする。したがって「異史氏曰」の様相は実に多彩なものになっているし、また、文藻にも力がそそがれていて、蒲松齢独特の、典故のある語句を使って、簡潔な美しい表現をし、芸術的なまとまりをみせている。

エッセイとしての「異史氏曰」の内容も多種多様で、その一つ一つをここに原文と訳とで示してゆくことは、紙面の関係上到底不可能であるので、とくに目ぼしいものだけに触れてみることにする。エッセイ的な「異史氏曰」の中で最も多くみられる随想は、当時の役人の不正不当な行為行動に関して発せられた感想、批評である。たとえば「濰水狐」の批語では、役人を驢馬にたとえ、怒ると荒々しくて、なにを言っているのかも、またなにをしようとしているのかもわからないが、まぐさで誘えば、首をすくめて嬉々として繋がれてしまうのだと諷刺し、「潞令」では、官吏たるものはすべて任につけば、汚職官吏であると清廉な官吏であるとを問わず、はぶりのよいときには人民の膏血をしぼりあげて贅沢三昧な生活をし、はぶりが衰えてくれば、殺しきらぬ人民を殺しつくしてでも自分の地位を保とうと、するこの両面をもつものだと非難している。このほか、役人の横暴ぶりがあらわれている小説の後には、かならずといってよいほど、その「異史氏曰」で役人を槍玉にあげて、欝憤をはらしている。とくに下役人に対する批評にはてきびしいものがあり、

『役所の下役人を殺した場合には、平民を殺した場合より罪三等を軽減するよう法律できめてほしい。下役人どもを手ひどい目にあわせるのは、けっして暴虐な行為ではない。なぜなら、こういう輩には、殺してはいけないというほどの奴はいないからである。』（「伍秋月」）といったぐあいである。蒲松齢のこのような批評は、庶民的な反抗感情を代弁するものでもあろうが、強い社会的な主張といったたぐいのものではない。増田渉先生も指摘されたように[注(7)]、蒲松齢の文人的な鋭敏な人間的感受性や正義感から発せられたものと見るべきであろう。

人間の愚かさに関する随想は、女性に関するものとともに、「異史氏曰」の注目すべき特色である。そのうち「阿宝」につけられているものについては、すでに全文と訳とによって示したが、その外に『愚かとは聰明の極みであり、無思無愁は愛情の至れるもの』（「花姑子」）と言ったり、『昔から庸は人に福を与えると言うが、かならず、鼻、口、眉、目のあたりに少しおろかなところをそなえていてこそ、福が随ってくるものである。かの目から鼻にぬけるような利巧者は、幽霊に見棄てられてしまう。おろかさのある所には、科挙合格なぞ、科場に入らないうちに得てしまうし、美人も親迎しないでやってくるものである。』（「周克昌」）と述べたりしている。これらを読むと、蒲松齢が人間のもつ愚かさをいつくしんでいることが感じられ、ラムの Essays of Elia の中の "All Fools Day" に似た味わいをもつものとして興味深く思われる。

女性に関する随想にも面白いものがある。『わたしがいつも言うことだが、先祖代々功徳を積まなければ高い官位につくことはできぬし、本人自身が数世にわたって功徳をつまなければ美人を手にいれることはできない。因果応報の道理を信ずるものは、かならずやわたしの言葉をでたらめだとは言わないであろう。』（「毛狐」）と言い、さらに『美人を得て一つ家に住むということは、天子の位をくれたって、取り換えっこなんかできはしない。』（「雲翠仙」）とか、『わたしは願う、ガンジス河畔の砂のように数ある仙人たちが、そろってなまめかしい女をおくってよこし、人間に婚姻せしめることを。さすれば浮世に貧窮するとも、衆生は苦しみをまぬがれる。』（「鳳仙」）とか言って、男の慾望の最たるものを肯定した蒲松齢は、女の美しさの前には、それが姦通をした女房であっても許してしまった亭主の例をあげて男の弱点を認めている（「佟客」）。しかしさすがに女房族の嫉妬やわがままにはしりごみの態度をみせ、『女がずるくて嫉妬ぶかいことは天性である。』（「邵女」）と断じ、『わたしの見るところでは、天下の婦人のうち、賢妻はせいぜい十人の

うち一人で、十中の九人までは悍馬である。』（「江城」）と嘆じ、『じゃじゃ馬や焼餅やきの女房は、それとめぐりあった男にとっては、いわば骨についた潰瘍のようなもので、それこそ死ななきゃなおらないものである。』（「雲羅公主」）と悲鳴をあげている。かくて、「どこの家の寝台にも、みな一匹の夜叉がいるではないか！」（「夜叉国」）とか、「恐妻は天下の通病である。」（「馬介甫」）とかいった言葉が吐かれる。蒲松齢の妻劉氏が美人で、松齢が彼女を愛しているゆえにこそ彼女を懼れていたらしい様子が彼の「元配劉孺人行実」という妻のことを書いた一文から察せられることを思うとき、これらの随想文は一層興味を増すものとなってくるであろう。

「異史氏曰」には、これらのほかに、人間のもついやらしい面や美わしい面に対する随想、人情の機微を追求した随想、宗教的な面に対する随想等々、いろ〳〵なものがある。それらは蒲松齢の内側に向った人間的興味のあらわれであり、心境の記録なのである。このような随想は、「聊斎志異」を模倣した数多い続撰の怪異小説集の通例となっている論賛形式の文になると、またもや姿を消してしまうのである。ただ終りに是非ともつけ加えて言っておかなければならないことがある。それは「聊斎志異」を意識しながら、これと対抗する立場で書かれた「閲微草堂筆記」に見られる著者紀昀の批語に関したことである。紀昀の批語の中で普通取りあげられるのは、宋儒の苛酷な人間批評の態度に対する批判の態度であるが、それだけがその特徴であるわけではない。彼の批評の文には、蒲松齢には見られない洗練された都会人的なセンスがあふれ、それのつけられている小説の全体とあいまって、一つのユニークなエッセイ文学を形造っていることに注目したいと思う。幸田露伴は「閲微草堂筆記」を「聊斎志異」よりも文学として上位にあるものとし、「異史氏曰」のことを、『イヤに気取った評論』とくさしているが[註(8)]、わたくしはこの両方にそれぞれ違った好さがあり、両方ともども、中国のエッセイの中における、味わい深い、価値ある存在だと思っている。

注(1) 論賛という呼称は唐の劉知幾の「史通」に始まる。

(2) 正確に言えば、現在の「史記」では、「外戚世家」「日者列伝」など「太史公曰」の欠けているものがあるが、もとはついていたに違いない。

(3) 「白氏文集」巻第二八所収。

日者又聞、親友間、説、礼吏部擧選人、多以僕私試賦判傳為準的。

(4) 商務印書館「叢書集成」初編所収・巻八（二二二頁）

唐之擧人、先藉當世顯人、以姓名達之主司。然後以所業投獻。踰數日、又投。謂之温卷。如幽怪録傳奇等皆是也。蓋此等文、備衆體、可以史才・詩筆・議論。至進士、則多以詩為贄。

(5)・(6) 大矢根文次郎「史記列伝と唐の伝奇について」（「早稲田大学教育学部学術研究」第六号所収）

(7) 平凡社「中国古典文学全集」22「聊斎志異」（下）の〝訳者あとがき〟

(8) 幸田露伴「怪談」